

無論確たる區別は出来ぬがこれかは後者に屬すると云つてよからう。以上の諸句中より、印のある部分を除いてかゝる感じを全し程度に云ひ現しうる句法か外にあらか、更に一步を進めて俳句以外如何なる詩かかゝる感興を歌ひうるものぞ、又全し俳句にしてもかゝる句法を用ひたのは「春夏秋冬」〔新俳句〕には餘り見當らぬ、況んや「七部集」時代「明鳥」時代をやである、然れども此に注意すべき事は穴勝ちに「角を値に」とか「雁金旅」とか辭典に見ぬ様な新熟語を作出するのが俳人の苦心だとの、手腕だとか云ふのでは無いが、複雑な感興を僅か十七文字の中に綜合せむとするには勢ひ常識的判断の許す範圍に於て他の散文的冗長な語句を捨て、新しき熟語を作出して俳句的となす必要は當然起り來るべき事だと思ふ。従つてこの方面に歟を入れるのも明治俳人の一事業として大に趣味ある事ではないか。

附記、此稿もど匆々の際筆をとりたる事なれば論理徹底せざる点多からむ。殊に最後の句の新傾向に就ては何れ稿を改めて詳論せむと欲す。幸に論の粗漫なるを咎むる勿れ。猶右に引用したる例句は昨年より本年に亘る日本俳壇より採録せり。
(十月二十二日夜認)

性格と運命

(友に興へて余が近狀を報ずる文の一節)

草 人 生

玉君足下、此の節にはツルゲネフの文を籍つて、私の告白をしやう。

レヂネフが學校時代の舊友、ルーデンの人物を批評して云ふ。

「ルーデンはけばくしい性質で何事にも口が先へ立つて事によると狂熱も余計あるかも知れん位で一寸見た處ではバコールスキより廻に立優つてゐる様であるが、實は比べものにならぬので。或想を促へてそれを言措す處は仲々巧ひ、それに議論も巧者だが、其の想と言うのが、自分の頭腦で産み出したものでなくて、多くはバコールスキの説を焼直した借物です。バコールスキは見た所では靜な優しい人で柔弱かどさね思はれる程だが、馬鹿に女が好きで、酒も飲めば、喧嘩もする。ルーデンは熱血があつて勇氣があつて活潑に見わるけれ共、内心は冷なもので少し臆病です、尤も耻を與されると無茶になつて了ふけれど……」

此から幾年か経過つた。露西亞平原の夜氣が冷たく肌をさし、碧の空には星が美しく眺められる觀樓の上で、ルーデン嫌なビガゾフや、その崇拜者バシトフや、又自分の妻の前で、レヂネフが恚う語る。

「私は彼の男を良く知つてゐる。欠点も良く判つてゐる。凡人でない代り欠点が目立つて見わる、」
「豪傑ですからな」とバシトフが應援する。

「豪傑の分子も幾分かあらう。けれども、意志が……これが一番の欠点だが、意思が如何も弱い。がそれは先あ可いとして彼男には仲々良い處がある。勝れた處がある。狂熱があるが狂熱と言うものは今の世の中では一番大切なもので。我々露西亞人は餘り理屈なくなつた、冷淡に無氣力になつて、眠つてゐる、薰んでゐる。誰でも關はない、一轉瞬の間でも、我々を動かし、我々の冷却した

なると學校万般の事に手を出したかる、初めは校長も信用して、その意見を良く採用したが、その中には、汚点あちも出る、同僚が中傷をする、復校長と喧嘩して飛出した。故郷に少し許りの田地はある、が、レヂネフが云ふ通り、今は倒死のたれ死にの外はないのだ。

ある寒い秋の夜、南ロシアの片田舎の小さい宿屋で、偶然、レヂネフはルーデンに會つた。昔し一緒にモスクオの學校で美しい青年時代を送つた此の二人、レヂネフは、未だ、老人と言ふ程ではないが、最うデツプリ体格も出來て、人にも推重たてられる年配であるが、ルーデンは尾羽打枯し、老の暗い影が顔にもさして、眼付も起居振舞も昔と變つた、言語もといひも氣の抜けた様で張合が無く、一体に様子が如何にもかつかりしてゐる。大方心の底では獨りで鬱々くよくしてゐるのであらう。

二人は、初めは妙に解さけなかつた、一度仲違した事もあるので。やがてシャンペンが來て幾度か祝盃が上げられると、話も興奮して來た。戸外そとは嵐が荒れて、戸が切りにはためく。

やがてルーデンが話し出した。「かうした「身の上になると、カリツオーフの歌の「身の措處おきどころなきまでに成り果てたるも若氣から」といふ句が身にこたへる、………けれども實際僕は何の役にも立たん奴だらうか？此世で僕に適する仕事はないのだらうか？僕は夫を平生疑つてゐるのだ。いくら自分で自分の估券を落さうとして見ても、どうも僕の天分は多少厚い方だと思はん譯には行かん。それなら何故此天分が無益になつて了ふのだらう？それから君と一所に外國に行て居た時分は僕もまだ自惚氣が強くて簡か間違つてゐた、成程彼時分は自分で自分の氣が知れなかつた。空論に酔つてゐて、夢の様な事を信じてゐた。けれども今僕が思つてゐる事は、誰の前でも憚らずに云へる。

情を温めるものがあつたら、それは思人と言うものです。最う良い加減に眼を覺さなけりやならんです。ねね、サシヤ、(レ)デネフが妻)た前とルーデンの噂をして冷淡だと言つて私が彼の男を非難したことが有つたつけな。冷淡と言つたのは間違つてゐると云つても良し、また間違つてゐないと言つても可い。彼男の冷いのは血が冷いので、頭が冷いのぢやない。——だから冷いと云つて責めるのは酷だ。それから彼時は手練師だと云つたけれども、手練師でも虚言家でもない、人を欺きはしない。始終餘所を泊り行いてゐるけれども卑しい心があつてゐないので、極く無邪氣で歩いてゐるのだ。それは成程何處かで、倒死(のたれじ)をするかも知れんが、倒死(のたれじ)したからとて、罵倒すべきものでせうか？意思の方が弱いから自分は何も仕事を仕ないけれども、それだからと云つて、社會を裨益しないとは云へぬ、既に裨益してゐないとも云へぬ。少年の内はルーデンのやうに天賦に欠けた處があつても、働く力意志を實行する能力の無い者ばかりでもないから、さういふ人達がルーデンの説を聞いたら大に得る所があるに違いない、……」

此の主人公のルーデンは案の如く幾年の漂浪生活を送つた。ある時は資本のある地主を利用して、農事改良に手を出したが、仕事は思はしからず、地主は羽布團(はねぶだん)の如く無暗にルーデンを壓制するのでつい喧嘩して飛出つて了び、又一度はある顯官の書記にならうとしたり、擧句には、此も腕一本(うで一本)の無資力者と計劃して運河の開鑿を企て、見事失敗して、遂に、事業に斷念して中學の教員となつた。何事でも遣つて見度い、一つ考が起ると是非著手して見ないと腹の虫が承知せぬ、然しやがて飽か來る、意見か變る、その次には失敗だ。中學でも初めは馬鹿に評判が良かった、そ

隠れたつて仕様がなから云つて了うか、僕は全く惡氣の無い人間だよ。だから温順おとなしくなつてゐる。境遇に適應おこたたく思つてゐる。大した望も起さんで卑近な目的で良いから達し度い、聊かでも良いから、世を益し度いと思つてゐる。けれどもどうも然う出來ない。如何いふ譯なんだらうか？何故僕にも人のやうに生活して行くことが出來んだらう？僕は今如何かして人並にしてゐ度いと云つて、そればかり思つてゐるのだ。それなのに僕はどうも地位が極るとか、境涯が定まるとかすると、安じてゐられなくなる。……僕は徐々おそく自分の運命が怖くなり出したよ！……一躰まあ如何いふ譯なんだらう？僕の爲に此の謎を解いて呉れ給へ。」

玉君！謎！謎！謎だよ。ルーヂン一人の謎ぢやなくて萬人の謎だ。

前節で私の過去二年間の思想感情の變轉や生活の有様を承知した君は、此のルーヂンの述懐しゅわいの中に私の偽らぬ告白を認めなければならぬ。私はルーヂンの中に私の眞實まひつの影を見た、そうして全じ謎に逢著したので。

前文に於いて私は偽らず、私の行爲の告白をした。だらしのない、不節制な、放恣な生活だつた。遊あそびもした、職務しごとも怠なまけた。學校も休む、讀書もしない、友達も私を了解するに苦しんだらう。然し私には人格に對する自家の考へと尙一種の衿はあつた。小人の心を以つて恣に大人の意料を測量する見識の卑きを笑つた。人格に對する世人の見解が根本的に私わがのと異つてゐるので、多衆の嘲罵の如きは敢て恐る處でなかつた、否寧ろ冷笑の態度もて此に接したので。然し私の生活は決して自然のも

のではなかつた。やがて不自然に對する動搖と矛盾とが起つて私の心は乱れたのだ。

ルーチンは私は悪い人間ぢやないと言つた。私も虚心平氣に省みて自分を下劣な人間だと思つて居ない、むしろ感情の美しいのに誇つて居た事は君か知れる所だと思ふ。私は父と母とを冷に觀察して、私が信する人格の意義に於いて私が卑い人間であるとは謙遜にも、言ひ度くない。強い功名心、理想と眞理に對する憧憬、此も私は敢へて多くの人に劣つてゐると言ひ度くない。然し全時に私は二十年來受けた、家庭、社會、友人、あらゆる周圍の感化と、その趣味性の傾向とが多少此等の性質と矛盾するのを自認する。私の生活の浪は此の兩者の衝突から起つたのだ。換言すれば理想と現實の矛盾である。天上に光る星に憧れても、足は一寸も穢土を離れぬではないか、但し現實に執著すれば向上の熱火が承知しない。平凡だが悲しい事實だ。此の兩者の調和を巧く胡魔化しうるものは語に仕合せである。然し火か水かの何方か、墮落か向上かの一途だと云ふ性質には、夫が出来ない、其處に多少の悲劇がある。

私とて心は常に知識慾に燃れてゐる、眞理に飢れてゐる。理想の影を認めて向上の一念が潮と湧くとき言ふ可からざる元氣が出る、空虚な生活、矛盾と虚偽な生活、情實に負けて己の眞の聲に従ひぬぬ生活、境遇と事情に支配されて、己の欲せざる方向へ流されて行く生活、此等を思ひ、更に自己の天分と將來を考へた時、心の悲みは何うであつたらう、さらに如何に雄々しい心を奮ひ起して過を償ふべく決心したか。半夜衾を蹴つて起き、孤燈挑げ盡して前途の向上に心を摧いた事も幾度であつたらう。

然し因果の理法と言ふ冷い、確かりした挫折がある、借つた負債は償還さにやならぬ、而も相當の利息をつけて、蒔いた種は自分で刈らねばならぬ、結實の善惡に拘らずだ。君は知つてゐたらう、中學に居る時少くとも自分では善だと考へた目的の爲めに私が境遇に立脚せぬ行爲をやつた事を。そんな事までが、意地悪くまつはりて、その矛盾の結果を齊らして私を責めるではないか、愆の如く現實の絆は當然の結果として切抜けやうと腕く私の体を犇とからめる、心の革命も辿るべき道を辿らねば中止せぬ、かくて心許りは星の光りにアレヨ〜と憧れ乍ら体は暗い暗い地獄へと落ちて行く。すると愈問へる、境遇の縛は愈々まる、心が狂ひ出す、そこにわたりや應と、足とつて挽き落す獅子身中の惡魔も居る、やがて嫌とは思ひ乍ら、好まぬ方向へと流れて行く。颶風に逢うて早瀬に流さる。島が見わる、岸に近かよらうとしても、潮流の力には如何にも勝てない、遠り行く島影を望み乍ら、自分の運命を悲しむ外はないのである。事情と境遇と自個の性格に支配されて、時代思潮に流されて行くものゝ生活も憐うではないか。

思想も、感情も變つた。凡の物の意義が分別らなくなつた。歴史が何んだ、道德か何んだ。凡の事が權威を失ひ出した。血を分けた親さねた互に了解する事が出来なくなつたぢやないか。實に淋しい、恐しい。廣い世の中に只の獨りだ。何者かに縋り度い、頼り度い。しかもそれが出来ないのだ。結局頼む處は自己である、自己を支配するものは自己のみだ。信仰あるものは幸福である。あらざる信仰を失つても自己を有する者はまだ生きて居られる。然しその唯一の自己さねも失つた者は奈何であらうか、嚴密にその結末を求むれば結局死か狂かである。自分の性格に愛想をつかした者位世

にみじめな者はあるまい。私も早や私の性格に倦き出したぢやないか。自分の進む途が分別らない、否自由にならないのだ、自由意識と云ふ、その自由意識を有し乍ら自己の意識の命する處に進みないぢやないか。然らば何物か自分の行動を支配する？それは矢張り自己は自己である、しかし自己以上の自己で自己の支配しうる處でない。その自己以上の自己に支配さるゝ自己に私は倦いたのだ。ロブソンの政雄は言う。

「廣い世間だもの多い人間だもの、悲しい處もあらう、楽しい人もあらう、それを一樣に決める事はないのだ。皆な体質と氣質がもとで、思ひ／＼の運命を作るのだ、境遇を作るのだ。掩の恚うなつたのも、掩の体質が作つたのだ、掩の氣質が作つたのだ。さて此の体質と氣質、汝は何處より來れる。無論血統を傳つて汝の祖先より遺傳したのだ」

氣質と体質、ルーデンの謎も解けば一の性格を云ふ事に歸する。意志が弱いのも、淺薄なものも、性格なのだ、氣質と体質なのだ、遺傳なのだ、血統なのだ。吁不可抗の勢力！悲しい謎である。解けば生存が危い謎だ。ルーデンを讀んだ時、事實私は自分の根底が覆つたかと感じた。暗い影が眼前に横つたぢやないか。全身の血が氷る許り、ゾツとしたのある。ルーデンは運命が怖くなつたと言ふ、その全じ運命を私が辿るのか。ルーデンは平凡な生活がし度い、卑近な事でも實現してみ度いと問ふる。私も普通の學生生活を遣り度い、皆と全じく感じ全じ様に活し度い。卑近を望である、しかし夫が出来ないのだからな。此間も野球の仕合を見物した、成程元氣で、計畧があつて面白い、非常に感興を覺わだが、さて應援なのであらうが、その野次り方の醜汚なる事は何うだ、私は言は

れぬ心の耻辱を感じたのである。一部か勝つか二部か勝つか、敵愾心は人情の自然である、然し其の熱狂して則をこねた行爲は何うであらう。對手を齟つてまでも自分の部を勝せ度いのか。私は巨うも了解が出来ぬ、諸君が自分の境遇に適應する爲め、感情を偽り、否偽らぬまでが誇張したのなら、私は幸だ。然し立派な諸君だ、そんな卑劣な事はあるまいと思ふ、そうなれば愈私は孤立である。感が丸で違ふのだ。御互の間に深い溝渠がある、永遠に解せられる時はあるまい。レヂネフは夫は生活が違ふからさよ云つた。然り生活が違ふからである、そうして夫は性格が違ふからである。「僕は何うも浮草の性質だよ、一所にいつまでも落ちてゐるのだ」とは、ルーチンの偽らぬ白状である、浮草も清い水の底に沈んで、最下層に流るゝ宇宙の大潮流に逢著して、永遠の沈黙を續けた儘、無窮の生命をわたいのだ。然り乍ら温い日光を吸ひ、暖い空氣に觸れて、白い花を咲かせ度い。その中には表面の潮流に推されて、行ねも知らず、漂浪ふて行く。浮草の運命！それも浮草の性質である。

「恐らく僕は最期を良くすまい」と怖れた、ルーチンは、果せるかな、幾年の漂浪の後、ある戦い、一彈丸の犠牲となつた。その如く、私も現代の表面に浮沈しつつも、やかては秋の日の冷い野邊に白い骨を曝すのではなからうか、生に疲れて、自個に倦いて。黙つて潔く服従しやう。私が唯一の君主は然しそれも私の性格が産んだ運命となれば是非が無い、黙つて潔く服従しやう。私が唯一の君主は私である。運命を怖れて自己に謀判はし度くはない。自個を離れて自己の生命はない、生きた他人となつて臭骸を保つのは嫌の事だ。悪魔と罵られて、外道と呼ばれても自己の性格を樹立し度い。私

は自分の性格には倦いてゐる、然し捨て度くない、捨てりや自個の生命が消失して丁ふ。それが私の運命だ。

K君！君が了解して呉れたか否かは何うでも良い、此だけ書けば、私の胸は晴々するのだ。云ふ事が淺薄だつたら、それも僕の性格だと思つて呉れ玉へ。私は自個の性格に倦いたと云つた、凡の事が解らなくなつたと云ふ、モシ夫を嚴格に發展せしめると、結論は死と狂である。しかし私は健在に生きてゐる、生活を續けてゐる。何かなくちやならない。即ち次の節に於いて、懷疑と努力につき、感想を記して、私か最近の思想を告白しやう。

烈しかつた雨かやつと熄んだ。ポタリ／＼と樹々の雫が芭蕉の葉に落ちてゐる。その冷そうな、寂しい音が、嫌に心に響く。冷やかな手で心をそゝる様な秋の力は私には苦しい。こゝ屋敷町の秋の夜は靜かに更けて行くよ。

(十月二十六日夜記)

よりん。

述 懷

春 畝 公

身世委孤劍。心分社稷憂。功名千載下。聊欲補皇猷。

乾坤不變。今古相通。魚躍淵水。鷹飛太空。